

ゼロ次予防

— 認知症の少ない社会をつくる

千葉大学予防医学センター教授
近藤克則

- * 人生100年時代の現実味が出発点
- * 日本の実状をビッグデータで検証
- * ゼロ次予防の考え方について
- * 日本にも認知症になりにくいまちがある
- * 社会的孤立が認知症発症率を高める
- * 社会参加の効果を考える
- * 通いの場を増やした実例と効果
- * 介護給付費も低下傾向に
- * 始まった認知症になりにくいまちづくり
- * 格差が生む健康を含めた様々な問題



柴生田 それでは開会いたします。（拍手）

本日は千葉大学の近藤先生においでいただきました。1958年のお生まれで、千葉大学をご卒業後、民間の医療機関にお勤めになった後、ケント大学で研究員をされ、その後、日本に戻られて、今、千葉大学で教授をされておられます。

ご専門は、後でご本人からしていただけるかと思いますが、英国で医療、特に健康格差の問題の研究を続けてこられて、今年「健康格差縮小を目指した社会疫学研究」で日本医師会医学賞を受賞されました。

コロナの問題で、今、たいへん社会が流動的になっておりますが、ご覧になった方もおられるかもしれませんが、毎日新聞等で、コロナを

ゼロリスクにすることによって、かえって他の社会的なリスク、様々なリスクが高まるという指摘をされました。そういった関係の意見が、こちらこちらで散見されるようになりましたが、そういった観点から、われわれの今後の生活、特に長生きする場合のリスクについて、今日はお話しただけだと思います。

それでは、近藤先生、よろしく願いたします。

人生100年時代の現実味が出発点

近藤 ただいまご紹介いただきました近藤です。

今日のテーマである認知症が少ない社会をつくらうとすると、医学的な知見にとどまらず、